

# 第1章 戦場

中国での戦い①

## 生死を決めたできごと

柳森茂夫さんのお話から

戦時中、私には生死を分けた三つのできごとがありました。

昭和十七年（一九四二年）五月、召集令状「赤紙」が私に届きました。赤紙が来たとき私は、もうこれで命はない、家には帰ってこれないと思いました。そのころ、日本はかなり弱くなっていった時代で、戦争に行くことは、もう生きては帰ってこれないということだったのです。戦争には死ぬ覚悟で行きました。

私は最初に、旭川の部隊に入りました。私の役割は衛生兵でした。旭川の部隊というのは、実は、アツツ島へ行く部隊でした。ところが、その部隊は昭和十八年の「アツツ島の戦い」で、ほとんど全滅しました。もし私がアツツ島に行っていれば、もう死んでいて、今、みなさんの前でお話することができなかつたでしょう。

ところが、そのとき、中国に行く部隊への募集があり、私は「どうせ死ぬのならどこでもいい、早く行った方がいい。」と思い、志願しました。アツツ島に行かないで、中国に行ったのです。これが、できごとの一つ目です。中国に行ったことで、とりあえず、第一の危機は乗り越えたということでした。

中国では最初、武漢というところに行きました。揚子江下流にある上海からずっと西の方へ行ったところにあります。私の役目は、弾に撃たれてけがをしたり病気をしたりした人たちを赤十字のマークをつけた車で前線から後方の野戦病院に運ぶことでした。また、野戦病院では治らない人を日本に帰すため上海に運ぶことも役目でした。

○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。あわい赤色の紙を用いたので、「赤紙」という。

○アツツ島 表紙裏地図

○武漢 表紙裏地図

○揚子江 今は「長江」と呼ぶことが主流。中華人民共和国の中部を東に流れて東シナ海に注ぐ大河。

○上海 表紙裏地図

○赤十字 白地に赤の十字をかけたしるし。「赤十字社」の標章マークのひとつ。赤十字社は敵味方の区別をしないで、傷ついた人を救う国際的な団体。標章を掲げている施設などは攻撃を受けないことになっている。

○制空権 航空機によって、空中を支配する力。

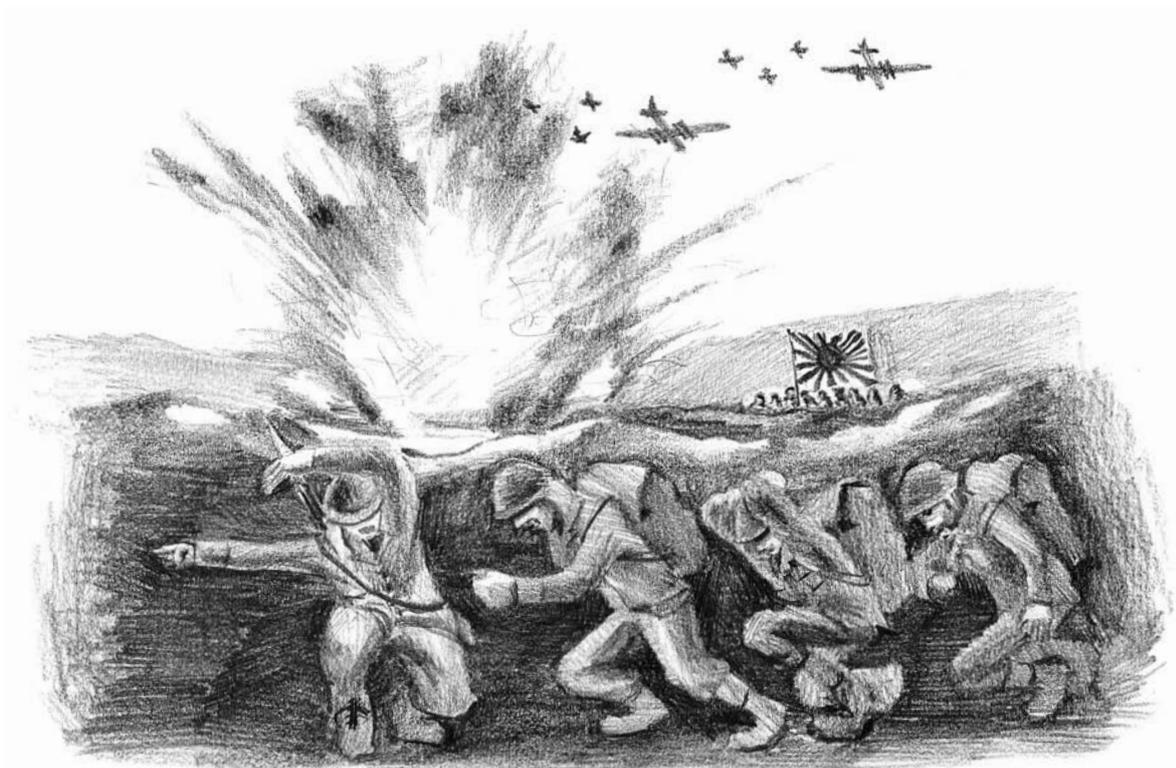
○長沙 表紙裏地図  
○駐屯 その地に軍隊が長くどどまっていること。

○B 29 第二次世界大戦末期に活躍したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。日本の空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

そのころ、中国はアメリカに制空権を全部握られていて、昼間は行動することができず、黙ってじっとし、車を葉っぱで隠すなどしていました。赤十字のついている車は、本当は攻撃してはいけないのですが、かまわず攻撃されました。ルールを破って当然という時代だったので。それで、夜になったら人が病院へ連れていくわけです。

昭和十九年七月二十一日、二番目のできごとが訪れました。このころは、さらに日本が弱くなっていたときです。当時私は、長沙に一時、駐屯していました。長沙は武漢より南の方、中国でも非常に大きな街です。事務室で事務の仕事をしていたときです。突然B 29が長沙の空に飛んできて襲撃し、爆弾をばんばん落としました。空は完全にアメリカが支配していて、爆弾をたくさん落としていきました。

生死を決めたできごと



イメージ図

中国で戦う日本軍

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○日中戦争 昭和十二年（一九三七年）から二十年（一九四五年）の間、日本と中華民国との間で行われた戦争。廬溝橋事件をきっかけにおきた。

○副官 航軍隊で、司令部・部隊の長官（高級の役職）を助け、事務の整理・監督にあたる士官。

防空壕は二つ作ってありました。前の方の防空壕と後ろの方の防空壕がありました。私は、部隊の副官と逃げました。前か後ろかどっちの防空壕に行こうかと迷い、私は後ろに行きました。頭隠して尻隠さずということわざどおり、お尻はまだ防空壕の外で、頭だけが防空壕に入っていた状態です。もうそのときには、私のいた部屋は全部爆弾を落とされてしまいました。

爆撃が終わった後、私は、前の防空壕に行った副官のことが気になりました。見に行くと、ちょうど体が半分とんでしまってもうなかったのです。体の半分が横たわっていたのです。爆風で飛んでしまっていたのです。防空壕に入る前に「みんな退避したか。」という声を聞いたことを覚えています。それだけ責任感の強い人でした。そのとき、副官と一緒に前の防空壕に入っていたら、このようなお話を伝えることができませんでした。



イメージ図

カーチス P40 に向かって小銃射撃

○カーチスP40 第二次世界大戦時のアメリカ、カーチス・ライト社製戦闘機。アメリカ陸軍の他連合国でも多数使用された。

○機関砲 機関銃より大きな砲弾を連射する武器。

最後に、三つ目のできごとです。昭和十九年（一九四四年）八月十八日。長沙の南方、洪橋において、突然敵機のカーチスP40、二機が飛んできたときのことです。二機は、私たちが昼間隠していた患者輸送車に向かって、機関砲をババババツと撃つてくるのです。その機関砲で撃たれたら、もちろん、部隊全員、完全に戦死です。それで、分隊長が、「どうせ死ぬなら撃て」と声をかけました。撃てと言っても、機関銃も大砲もないので、みんな小銃で、二機のカーチスP40の戦闘機に向かって撃ちました。小さい鉄砲です。あつちは大きな飛行機で、ダダダダツと撃つてきて、こっちはバン、バン、バンという小さな鉄砲です。どう考えても、かないっこありません。みんな死ぬ覚悟で応戦しました。当然、みんな死ぬはずだったので。ここですごいできごとが起きました。だれかの弾が一発、バーンと、カーチスP40の風防ガラスに当たって、飛行機が落ちました。後で調べてみたら、小銃の弾が二十六発、飛行機に当たっていました。小銃二十六発で一機落としてしまったのです。そして、一機落ちたので、もう一機は慌てて逃げていきました。最初の機が落ちなかったら、もちろん機関砲は上からどんどん撃ってくるわけですから、私は助かっていなかったでしょう。

戦争というのは、本当に多くの人の命を奪い取ってしまします。私は、戦争を実際に経験して、命というものがいかに大切なものかを知りました。戦争で命を失うということは本当に残念なことです。みなさんが平和のために一生懸命これから尽くしていくことを願っています。

DATA

平成20年度北区平和事業

聴き取り

- ・平成20年8月5日
- ・あいの里児童会館



柳森茂夫(やなぎもり・しげお)さん

- ・大正9年(1920年)生まれ
- ・札幌市北区在住

生死を決めたできごと